

## 2014年度短期大学部自己点検・評価

### 1. 全体

短期大学基準協会の区分	活動内容と成果
<b>基準Ⅰ 建学の精神と教育の効果</b>	
<b>建学の精神</b>	
<b>建学の精神</b>	<p>現在、岐阜済美学院は、2018年の創立100周年に向けて立てられた「アクションプラン」（2013～2018年）に基づいて教育活動を展開している。その「長期ビジョン」として「知恵ある生活を修め、科学の知と技を究め、地域に貢献する人材輩出」がうたわれている。この「知恵ある生活」が建学の精神にかかわる柱である。（従前）</p> <p>2014年に刊行した「建学の精神」および本学院の歴史に関する高校・大学共通テキスト『知識のはじめ—私たちの岐阜済美学院—』は、新年度オリエンテーション時に入学者および新任教職員全員に配布された。</p> <p>短大部では、オリエンテーション時のガイダンス「キリスト教教育について」の時間と全学必修科目「キリスト教概論」の授業（第2回と第3回）において扱った。</p> <p>テキストは、本学院の96年の歴史が創立者らの熱意を示すエピソードと共に語られ、「建学の精神」の語句についての解説が「神と人と自然を大切にする」という観点で述べられており、新入生の本学でのアイデンティティ形成に寄与できたと考えている。</p>
<b>自己点検・評価</b>	
<b>実施体制の確立</b>	<p>2014年度では、教育改革全体を検討する場として「教育改革委員会」「FD委員会」「自己点検・評価委員会」が連携して合同委員会を開催し、情報交換と活動の連携を図った。①特に、教育改革委員会の議論は多角的な視点で検討を要することが多く、合同委員会で具体的な検討を進めている。そのうち、2013年度からの課題であった学習支援の必要な学生への取り組みとして、再試験や補習授業の必要性について検討し、基礎的学習力を身につけさせる活動に短大として取り組むこととした。②FD委員会では、FD活動の日常化を進め、授業に関する調査（学生による授業評価）に基づくワークショップを開催し、授業改善に向けた活動が定例化なされてきた。また、授業評価アンケートの項目を見直し実施した。③自己点検評価委員会では、年度ごとの自己点検評価項目を検討し、それに基づいて各学科教員が全員参加で点検・評価を行い、それぞれの活動内容・成果や課題をまとめた。その結果の公表方法についても検討し、ホームページを活用し毎年の自己点検・評価結果を公表していくこととした。</p>

## 2. 社会福祉学科

短大基準協会	2014年度事業計画	内容と成果
基準Ⅱ 教育課程と学生支援		
教育課程		
教育課程編成・実施の方針	・効果的な教育への取り組み	<p>授業・学習支援のための独自の学習管理機能・システムを備えたMoodleを活用し、演習授業において習得すべき技術を動画映像で公開することによって、技術教育における授業時間不足および指導側のマンパワー不足を補完するとともに、学生の学習進度にしたがった自主学習（予習・復習）を強化することをねらいとした授業改善を試みる準備を行った。</p> <p>その結果、本学短期大学部社会福祉学科の2015年度前期開講演習科目「リラクセーションケア」（担当教員：社会福祉学科 教授 横山さつき）において、履修者が授業時間外にインターネットからサーバーにアクセスして、毎回の演習授業で練習する技術の予習・復習ができ、その自主練習の状況や修得度の自己評価等を担当教員にインターネット上で報告し、さらにその報告内容に対して担当教員がコメントを返信するシステムが完成し、2015年度より試行予定である。</p>
	・実習施設等との連携推進による効果的な実習教育と学生の実習満足度の向上を目指す。	<p>実習教育の充実に向けて、学科教員の分担、施設指導者、その他関係者との連携をもとに、以下のことに取り組んだ。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①実習指導教材の開発・整備</li> <li>②実習激励会の開催</li> <li>③実習施設からの本学への特別講師依頼</li> <li>④救命救急講習の実施（消防署からの講師派遣）</li> <li>⑤その他、実習施設との連絡、指導関連教材、備品・消耗品等の整備</li> </ol>
	・医療的ケア導入に向けた取り組み	<p>医療的ケア担当教員の確保のために、中部学院大学看護リハビリテーション学部看護学科の専任教員（看護師資格をもつ教員）に指導資格を取得するための介護職員等による喀痰吸引研修を受講してもらった。</p> <p>2014年度に調査をしたところ、2013年度入学生において医療的ケアの実際を介護実習において見学できた者は1割程度であり、体験のための環境が十分でないことが分かった。</p>
	・新コース導入に向けた取り組み	<p>社会福祉学科では、介護福祉士を取得しない学生の履修モデルのあり方を、学内に設けられた特別委員会と協力し検討を重ねてきた。その結果、①2014年度からスタートした「介護福祉コース」と「健康支援コース」を統合して、2016年度から介護福祉士取得のモデルを「介護福祉コース」として一本化すること。②その上で、介護福祉士取得をしない学生の履修モデルを「美・デザインコース」として新設することとした。</p>
	国際交流活動の実施	<p>介護現場が多様化・国際化しつつある現在、学生時代に広い視野を養うと共に、社会全体で貢献できる人材を育成する目的で、以下の3点の国際交流を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. フィリピン・ミンダナオ国際大学（MKD）との交流・研修            全学対象の海外研修「ミンダナオ国際大学（MKD）との交流・研修」（8月18日～22日）に、本学科から学生10名と教員3名が参加した。            プログラムでは、野村准教授がMKDでの一日ワークショップ（日本の介護）を担当した。</li> <li>2. ミンダナオ国際大学（MKD）との交流・研修②            協定先のMKDの社会福祉学科4年生2名が交流のため派遣された。交流プログラムとしては、社会福祉学科の授業を聴講し、近隣の福祉施設等の見学研修を行った。また、本学の大学祭にも参加して学生との交流を深めた。</li> <li>3. 特別講義「アジアの保健・福祉を学ぶ」（第6回）            10月16日の4限を1、2年生合同ゼミナールとして「アジア保健研修所（AHI）」から講師を招いて、アジアの地域保健／福祉についての研修を行った。講師は、メナクシ・ライ先生（女性）をブータンから招き、ブータンにおける女性の地位向上についての働きを学んだ。通訳はAHI職員の中島隆宏先生であった。</li> </ol>

入学者受け入れの方針		
学習成果の査定	・達成度評価の検討	介護技術到達度調査によって把握された課題の対処方略について検討し、グループホーム実習を取り入れるなどの対応策を講じるなど、教育内容や体制の見直しを行った。 追調査として、介護学生による自己評価に介護実習先の指導者による評価を加えての調査を行い、評価尺度の再検討と妥当な到達目標の設定を行った。
学生の卒業後評価	・卒業生の把握と同窓会の組織化（介護事業所への調査を含む）	本学科の卒業生が就職した施設（介護老人福祉施設・介護老人保健施設等）を対象に、卒業生および介護福祉士教育の内容についての評価および意見を把握し、今後の介護福祉教育のあり方の検討資料とすることを目的としてアンケートを行った。その結果、本学科を卒業した職員については、「現場の戦力になっている」、「将来性がある」等、高く評価されていることがわかった。
学生支援		
学習成果獲得に向けた組織的学習支援	・入学時の学習適応への支援（基礎ゼミの活動、宿泊研修、その他）初年次教育	1年生に対する学習適応を主眼とした取り組みは、本年度も「基礎ゼミナール」を中心に取り組んだ。今年度は、特にゼミ担当教員と学生の適合性を考慮し、合同学習の機会を増やす工夫をしている。前期では、4ゼミナールとも宿泊研修の活動を軸にした準備、実施、振り返りの過程の中で自分たちの役割を学ぶとともに、ゼミ合同で「振り返りと発表」の演習を行った。また、「読む力・書く力」の基礎学習として、文章作法や新聞記事の要約方法を具体的に学習をした。 後期では、昨年度から実施しているレポート作成のプログラムに基づき、レポート作成のためのワーク・シート（全5回）に従って、テーマの絞り込みから文献調査、執筆まで体系的に取り組んだ。後期の評価は主にこのレポートによって行っている。
	・国家試験対策	模擬試験の結果等から、年々成績が低下傾向にある。そのため、新たな対策として、①1年生を対象に1年次履修の指定科目を対象とした筆記試験を、中間試験として各科目の担当教員が行った。加えて、②1年生を対象に、夏季休暇である8月上旬に外部講師による特別講義と集中講座（前期履修の指定科目）を行った。 さらに、3学科（中部学院大学の介護支援コースと中部学院大学短期大学部専攻科、社会福祉学科）合同の国家試験対策（3学科合同での模擬試験の実施、3学科の介護教員による修得度別の対策講座の合同実施、Moodleを利用したe-ラーニングによる学習システムの創設）について協議し、2015年度の実施を決定した。
学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援	学生生活支援の取り組み	入学時に実施するウェルネスチェックシートより学生全員の健康状態を把握し、配慮学生の情報の共有化を図っている。受診やカウンセリングの必要な場合には、専門家によるコンサルテーションを受けるように指導している。ウェルネスチェックの結果を踏まえて宿泊研修に行く前に学科で健康状態の共有化を図っている。宿泊研修では、生活行動観察が十分できるため、1年次前期から、学習場面で配慮を要する学生の気になる情報を関係教員と随時情報を密に図るようにした。学生間のトラブルにおいては、ゼミ担当教員が個別対応を図り、必要に応じて学科長及び学生支援担当教員との面談を行う。そして、更に専門家の指導を必要とする場合には、保護者面談を行っている。また、保護者・キャリア支援センターなどと連携強化を図ることができた。
進路支援	就職率100%に向けた取り組み	2014年度も、就職希望者はすべて就労先が決まり、そのうち95%が介護・福祉職に就いている。キャリア支援センター、各ゼミでのきめ細かい支援が効を奏したと言える。就労に向け、全体への働きかけまた個別への対応は早期から開始しているが、その年により介護の求人・採用の出足がおそく、内定も遅れるという傾向も見られた。

<p>受験生に対する受け入れ方針の明確化</p>	<p>・高大連携講座</p>	<p>連携協定を結んでいる高校を対象に介護講座を実施した。済美高校は2年生、3年生を通した「めざそう快護人」の講座を開講し、2年間の講座を修了した生徒には、本学入学後に一般教育科目で単位認定する形での整備を行った。そのほか、これまで実施してきた山県高校、益田清風高校との連携講座のほか、関有知高校での音楽療法講座の実施など、新規の連携授業を実施し、今後の授業等を通じた連携の足がかりとなる活動を展開した。このほか、県内及び愛知県の高校への出前講座を7回実施し、介護を目指す高校生や教員への具体的な説明をする機会を得ることができた。</p>
	<p>・オープンキャンパス</p>	<p>2014年度オープンキャンパスは、例年通り5月から10月および3月のキャンパスナビゲートを含め計7回実施をした。毎回、介護福祉に関係した模擬授業や福祉機器、福祉レクリエーションなどを体験する企画を用意している。また教員や在校生と話をする時間を多くもつことで、高校生が親しみやすい環境を整えた。その結果、本学科のオープンキャンパスに参加した高校3年生のうち出願に繋がった割合は高かった。この割合は2013年度より向上している。これは、本学科の受験を決めてから参加している割合が高いことは予測されるが、同時に、オープンキャンパスによって出願を決めている可能性もあるため、十分な役割を果たしているといえる。</p>
	<p>・多媒体での広報</p>	<p>本学ホームページは32回更新し、学科の取り組みと共に高校生が求める情報を予測し、奨学金の情報や授業風景などについて積極的に取り上げるように努めた。また高校訪問は過去の入学者の統計から重点校を決め、教員が分担をして訪問し、学科での取り組みについて進路指導担当教員に伝えている。また8月には高校生を対象とした介護体験セミナーをおこない、実際の介護現場を知ってもらう機会とした。さらに、3月の職業訓練生募集に関連し、1月下旬に募集チラシを配布している。その他、マスコミに働きかけをおこない、5月の新入生宿泊研修や2月の自動車メーカーの新聞広告との連携など新聞で取り上げられた。</p>
	<p>・介護の日</p>	<p>11月11日の「介護の日」啓発活動を2009年度から学外にて行っている。2014年度は11月1日に柳ヶ瀬商店街にて、学生が呼びかけを行い介護に携わっている方に対して感謝の気持ちを込めたバラの花を手渡した。また商店街常設ステージでは、学生による楽器演奏や和太鼓サークルの演奏、また介護事業所職員による介護劇などを行うことで、地域の方々の関心を喚起した。地域住民の反応から、関心や認知度は上がっていると思われる。また活動前に学生キャラバン隊を編成し、岐阜新聞・中日新聞・NHK岐阜放送局を事前訪問し、活動のアピールをおこなった。これにより、各新聞やインターネット上で取り上げられていたことも功を奏した。</p>

基準Ⅲ 教育資源と財的資源		
人的資源		
教育課程編成・実施の方針に基づく教員組織の整備		
教育課程編成・実施の方針に基づく教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員研修</li> <li>・研究状況</li> </ul>	<p>日本介護福祉士養成施設協会（以下、介養協とする）全国教員研修会に1人、東海北陸ブロック教員研修会に7人を派遣した。</p> <p>科学研究費助成事業は継続が2件（いずれも研究代表者）、申請中が2件（研究代表1件、分担者1件）である。学内特別研究費助成については、交付が3件（奨励研究1件、共同研究1件、社会福祉学科教員による共同研究が1件）である。</p>
その他		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域連携活動の推進</li> </ul>	<p>大学所在地である向山団地自治会をはじめ、大学が連携協定を取り結んでいる自治体や福祉施設と密接にかかわりながら教育活動を展開している。以下の積み重ねの結果「地に強い中部学院大学短期大学部」として知名度と信頼が高まり、学生の就職活動に多いに役立っている。</p> <p>具体的には、①向山長寿会のみなさんと学科1年生によるグランドゴルフ交流会の開催、②介護技術実技試験の高齢者役に向山長寿会のみなさんを迎えて実施、③入学時宿泊研修の村内各地での交流活動を白川村役場と住民のみなさんの協力により実施、④飛騨地区福祉の仕事相談会の実施、などである。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒後教育（介護福祉セミナー）</li> </ul>	<p>第14回の「介護福祉セミナー」を2015年3月に開催した。「つながる地域・つなげる介護」というテーマで、株式会社ミライロの垣内氏による基調講演および介護関係者による実践報告およびシンポジウムがあり、介護・福祉分野での発想や価値観の転換、多職種連携・人材育成といったテーマが参加者とともに深められた。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業時共通試験</li> </ul>	<p>2015年2月に実施された卒業時共通試験では、受験者全員が合格した。それにむけ、模擬試験および対策講座を重ねて行い、一定の成果が得られた。</p>

### 3. 幼児教育学科

短大基準協会	2014年度事業計画	内容と成果
<b>基準Ⅱ 教育課程と学生支援</b>		
<b>教育課程</b>		
教育課程編成・実施の方針	・コース制	3つのコースからなる専門ゼミナールでは、コースとしての特色を見直し、地域との連携のもと、より充実した教育活動が展開できた。また、その成果を卒業レポートや要旨集にまとめ、学びを深めることができた。成果発表は、学生の主体性を重視した全員参加の体制で取り組めたことが評価できる。桐が丘幼稚園児との合同観劇鑑賞会では、幼児と共にプロの劇団の演技に感動を覚えると共に、幼児理解を深めることができた。
学習成果の査定	・実習にあわせた評価方法の検討	実習委員会を月1回開催し、各実習指導担当として共通理解することや問題点について話し合い、指導内容について確認しあうことができた。 1・2年が伝え合う実習体験交流会を実施し、意見交流を通してそれぞれの立場で自分自身が学ぶ視点を明確にできた。特に1年生は初めての实習に対しての不安を抱えているため、実習記録のとり方や現場の保育者とのかかわり方などの具体的な話を聞くことができ、不安の解消につなげることができた。
学生の卒業後評価	・現場ニーズの把握	2014年度については未実施。
<b>学生支援</b>		
学習成果獲得に向けた教育資源の有効活用		これまでの担当者が不在となり、今年度の利用に向けての準備が遅れたため、結果的にほとんど活用されなかった。検討した結果、e-chubuの扱い方が難しく、また、利用の用途の拡大が見込めないため、今年度いっぱいでの利用を取り止めにする事とした。
学習成果獲得に向けた組織的学習支援	・初年次教育	2014年度は、「あそびすと養成講座の充実」と「基礎・基本となる学習能力の習得」を目標に初年次教育を実施した。学生の自ら学ぶ力をさらに養い、授業への積極的な参加を促すよう1年生ゼミの時間を利用し、学生に大学生としての心得や意義、学習に対する考え方などを説明した。学生自身も教育実習を経験することにより、初年次教育の必要性を感じ、実習後は自己課題を明確にし、その改善を積極的に行っていた。自分自身を知ることににより、他者理解が深まり保育士を目指す学生として望ましい姿が見受けられた。
	・新入生宿泊研修	1年生基礎ゼミナールにおいて、学生のコミュニケーション能力を高め、大学生活への早期適応を図ることを目的に5月1泊2日の行程で宿泊研修を実施した。宿泊及び研修先はトヨタ白川郷自然学校であった。主な研修内容は、世界遺産白川郷合掌集落の散策、白川村での子育て事情について現地インタビューなどのフィールドワーク、宿泊施設では白川村の村民の方との交流をグループディスカッション形式で実施した。また自然あそびの体験の実施など、学生、教員が交流し、新しい学生生活の、より良い第一歩を築く成果をあげた。
	・1・2年ゼミナール検討会	昨年度から実施内容の共通化を図っている。今年度も学科全体や学年ごとに共通の内容を実施した。学科全体では、あそびすと交流会（4月）、保育フォーラム（1月）を実施した。1年ゼミでは、初年次教育、あそびすと養成講座等を実施し、2年ゼミでは、劇団風の子鑑賞会、就職活動に関する講演会等を実施した。また、来年度のゼミ教員配置について検討し、1年ゼミ4名、2年ゼミ7名の配置とした。
	・教職実践演習の充実化会議	外部講師など教職実践演習の授業内容について、ゼミ担当者会議に合わせて検討、実施した。
	・ボランティア活動	2013年度の課題として、ボランティアへ学生を動員する企画の種類・時期に偏りがあったため、学科の学事日程上無理がない範囲で積極的な学生動員が可能となるように再検討を行った。そのため、2014年度幼児教育学科として11回のイベントへの学生ボランティアの動員を位置づけて組織的な学習支援を行った。学生のボランティア活動への参加は、学習成果の獲得のみならず就職に結びつく実績も残されている。なお、学生が参加したボランティア活動一覧については、資料参照とする。
	・保育フォーラムの充実	毎年1月第4土曜日に保育フォーラムを開催している。在学生は1年間のゼミナール活動の成果を発表し、卒業生は1年間の経験について講演した。卒業生との交流は、在学生にとり進路選択のきっかけとなっている。また、卒業生には社会人としての1年間を省察し、自らの仕事に自信をもつ機会ともなっている。 今年度で5回目の実施であったが、本学科の行事として定着しつつある。卒業後1年目のみならず、毎年参加する卒業生も見受けられるようになってきた。

学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援		本年度特に充実した生活支援は、学科会議において学生の授業欠席回数を確認し、欠席の多い学生への対応を学科全体として考え、問題が重症化する前に対応するよう心掛けた。そして気になる学生に関しては教員間で共通理解を深め、ゼミ教員が細部に気を配り家庭と連携を取りながら指導を進めた。 また、本年度前期は外部講師を招いて講話を聴き、学生生活の見直しの糸口とすることができ成果が見られた。
進路支援		1年次、2年次とも入学時・進級時にキャリア支援センターからのガイダンスを行い、一人ひとりが進路について考える機会としている。また、1年次後期には、「仕事と人生」の講義と冬より始まる公務員対策講座、2年次5月には、キャリア支援センター職員による個人面談と就職ガイダンス、各仕事相談会の案内、メール登録による就職情報発信を行っている。ゼミ担当教員、キャリア支援委員、学科長、キャリア支援センターと支援構造を密にし、きめ細やかな支援を行っている。 その結果、今年度は学生の進路決定への意識づけを早く行うことができ、就職・進学決定も早い段階で決まり、全体として就職率100%を達成している。
受験生に対する受け入れ方針の明確化	・学科教員の高校訪問	学科教員が担当高校を入試広報課の職員とともに訪問した。その際の資料として、その高校出身の在学生の短大生活や進路（就職）の状況を伝え、本学で学ぶことの具体的なイメージを持ってもらうことができた。進路指導の教員と直接会うことで、学科への質問や疑問に、入試広報課の職員が持ち帰ることなくその場で返答できた。進路指導の教員からは、3年生の進路先希望調査結果を数字として提供していただけることや、3年生三者懇談での進路に関する傾向など、情報をいただいた。このように進路指導の教員と意見交換することで、その年の変化や情報をリアルタイムで得る機会となった。
	・出前授業	出前授業として、14年度は積極的に模擬授業を行った。高校側の開催により、進路決定の手段としてより多くの高校生が体験できる利点がある。出前授業は1・2年生対象が多かった。保育者志望の減少が懸念されることから、年齢の早い時期へのアピールは重要で、進路がまだ決定していない段階での体験学習は有効であった。短大教員による授業は、入学後必要とされる学習力を示す機会でもあり、新入生初年次教育への導入編として有効である。また、オープンキャンパスへつながるよう資料を提供してきた。
	・高大連携科目	高大連携事業として、済美高等学校の高校生を対象として実施した。昨年同様、入学後、本科目（「子どもの世界」）は大学の単位として認定される。
	・高校生向け講座	本年度の講座は、高校生の入学前調査での不安科目である実技2教科（音楽と造形）を8月1日に開講した。受講生は高校1・2年生も受講しており、高校生にとって入学前に学んでおくことの導入や、不安解決策提供の機会にできた。学習の早期準備の提示が可能で、入学前教育と位置付けることができる。また、この2科目共に、個別対応によって個々の能力に合った学習法が提供できている。
<b>基準Ⅲ 教育資源と財的資源</b>		
<b>人的資源</b>		
教育課程編成・実施の方針に基づく教育研究活動	・教員研修の充実	保育者養成に関する情報を共有するために、保育士養成協議会全国セミナー（2名）、中部ブロックセミナー（1名）、同会研修会（2名）に代表者が参加した。 学外競争研究資金については2名が研究代表者として、1名が研究分担者として科学研究費助成金を受託している。その他、学内特別研究費に2件が採択され、1年間の研究に取り組んできた。それぞれ、成果発表を準備している状況である。研究活動には全教員が積極的に取り組もうとする態勢がある。
その他	・地域連携活動	長良川鉄道との地域連携である「“あそびスター”トレイン」、郡上市との連携活動である「ぐじょうファミリーフェスタ」を実施した。「“あそびスター”トレイン」については、今年で5年目に入る活動であり、2014年度は2回の活動を行った。「ぐじょうファミリーフェスタ」については、今年で2年目の活動となるため、イベントの目的をしっかりと意識をしてボランティア活動の目標をもち、郡上市出身学生が中心となって企画段階から活動を展開した。また、本年度はハンドベルサークルの参加協力もあり、家族と一緒に本格的な音楽を楽しむことができたとの評価を受けている。

## 4. 専攻科

短大基準協会	2014年度事業計画	内容と成果
<b>基準Ⅱ 教育課程と学生支援</b>		
<b>教育課程</b>		
<b>学習成果の査定</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎実習事前事後指導強化</li> <li>実習アンケート</li> <li>グループ反省</li> <li>個人反省</li> <li>◎卒業研究指導</li> <li>図書館利用ガイダンス、</li> <li>中間発表会、</li> <li>大学祭での抄録発表、</li> <li>抄録集作成、</li> <li>卒業論文発表会準備</li> </ul>	<p>①開講科目ごとに定期試験を通じて学習成果の評価を行い、GPAは卒業時の学長表彰に活用した。その他の評価としては、②実習段階に応じた実習指導者の評価、巡回教員の評価を毎回学生に返して、実習の振り返りと共に、授業の中で何を身につけなければならないか、総合的な学習支援に活用した。また、③卒業時に行われる「卒業時全国共通試験」は、1年間の学びの総評価の場であるため、受験対策講座を実施する等、準備を十分にさせて取り組むように指導をおこなった。</p>
<b>学習成果獲得に向けた組織的学習支援</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習教育の充実</li> </ul>	<p>少人数のクラス単位として、それぞれの学生に役割を持たせることで、責任感をもって協力しながら1年間を過ごすように支援をおこなった。その結果、特に、実習や卒業論文作成、卒業試験においてお互いに声を掛け合える環境が作られていた。</p>
<b>進路支援</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別面談の実施（全員）</li> <li>・未決定者への個別面談（都度）</li> <li>・キャリア支援センター活用の促し</li> <li>・学内就職説明会の参加</li> </ul>	<p>入学当初に全員に面談を行い進路希望調査を行った。また、随時面接しながら、就職決定まで支援を行う。さらに、学内の就職支援部署であるキャリア支援センターに行き、現状の説明や就職活動の相談を積極的に行うよう促した。特に就職困難が見込まれる場合は教員だけでなく、キャリア支援センタースタッフと共に支援を行う。学内で開催された就職説明会に全員参加させ、就労意識の向上を図った。このような取り組みから、3月上旬に就職率100%を達成した。</p>
<b>受験生に対する受け入れ方針の明確化</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専攻科の特性の広報</li> <li>・社会人学生の募集</li> <li>・短大訪問（学生募集）</li> <li>・卒業生・幼児教育学科2年の保護者宛のDM</li> </ul>	<p>・専攻科の広報を行うため、教員が県内外の短期大学を廻り、学生確保の広報活動を行った。また本学の幼児教育学科の学生に対して、在学中の専攻科生との交流会を2回行い身近に感じてもらうよう工夫した。さらに幼児教育学科2年生の保護者宛にDM送付も行うと共に、「保育士のための介護技術セミナー」を行い、広く地域に対しても啓蒙活動を行った。</p>
<b>その他</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域連携活動（日本介護福祉士会主催 第1回介護コンテスト代表で出場）</li> </ul>	<p>本年度は、県内の大学や特別支援学校の生徒と交流会を行った。また、介護の日の啓発事業として、社会福祉協会のイベントに全員参加をした。卒業論文発表会では、来年度の専攻科入学生や実習施設の職員を招いて聴講してもらい、意見を述べてもらった。さらに近隣の福祉施設を訪問し、音楽療法の実践した。</p>